N-95

通俗

曹洞宗の安心

267
635

目次

一　序言……一
二　信仰……二
三　宗要の二方面……五
四　禪とは何か……五
五　達磨正傳の禪……六
六　坐禪の必用……七
七　坐禪の儀則……一〇
八　坐禪の目的……一三
九　戒とは何か……一五
一〇　戒源……一六
一一　禪戒……一七
一二　十六條戒……一八
一三　受戒の次第……二〇
一四　戒法の二義……二二
一五　坐禪と受戒……二二
一六　禪戒一致……二三
一七　修證不二……二六
一八　歸結……二六

特49
966

曹洞宗の安心

秋野孝道述

45. 3. 15
内交

一　序言

今日は哲學であるとか科學であるとか云うて、世間の學問が非常に進んで來たのにつれて、佛教學者の方に於きましても其の説明講話と云ふやうなことを、大分學問風にやると云ふやうに成つて來たのであります、これは誠に結構なことでありますが、併し説明の方便として或る程度までその形式を借りると云ふことは必要でありまするが、佛教を單に學問として講釋して了ふやうなことになつてはこれも一つの弊害と云はねばなりませぬ、元來宗教は學問ではない、理屈ではないから、説明が如何に巧妙であつたにしたところで、理論が如何に緻密であつたにしたところで、それのみを以て宗教の眞の面目を發揮されたものとは決して言へないのであります、故に佛教何れの宗旨の書物を見ても、理論を説く上に於い

て一應説明はしてありますが、その後には必らず實行と云ふ事が丁寧に説かれてあるのであります、元來これは佛教に限らず、宗教に於きましては、文字や言説を以つては到底説き盡されない所があることを知らねばなりません、これが宗教の價値のあるところで、これが宗教の特色で、宗教が學問に異なるところでありまして、又これが如何なる時代に於いても宗教と云ふものゝ必要を感ずる根本となるところのものであります。

二　信仰

廣い話は暫く措きまして、前述した通りに吾が佛教の目的は宇宙の始終を解釋するのでもなければ、人生の意義を説明するにあるでもない、それも或る場合には必要でもあらう、又諸經論の中に説いてもあるのでありますが、眞の目的とするところは、自己の身心を根本より解脱してこれを實際の上に活現すと云ふにあるのであります、言葉を換へて言うて見ると、自己の身心を決擇することであつて、即ち安心を得るのが佛教の目的であります、現在日本に於きましては十三宗

四十餘派あつて、其の形式や方法こそ異なつて居りますけれども、其の本源に到つては皆一如であります、故に佛教に於きましては、疑を起してそれから研究すると云ふ學問とは丁度正反對に、その初入の要心としては先づ第一に信仰と云ふ事が大切であります、信仰が無かつたならば、その人は安心立命することの出來ないことは言はずもがな、既に佛教徒としての資格の無い者であると云ふことは私が言ふまでもありません、信仰は入道の始めであると同時に又入道の終りであると云ふ事が出來ます、初發心の時より安心立命に到るまで一時も此の信を離れては居らぬのであります、されば佛も「佛法の大海は信を能入となす」と御示し遊ばされたるのみならず、華嚴經には「信は能く智の功德を增長す、信あらば能く必らず如來地に到る、信は諸根をして明淨ならしむ、信力堅固なれば能く壞するものなし」と、又金剛經には「信心清淨なれば則ち實相を生ず」と、又華嚴經に「信は道元功德の母なり一切諸の善法を增長す」とあります、斯の如くにして信仰は入道の第一義でありまして又修行の根底をなすものであります、今私は此所に曹洞宗の安心を御話するのでありますが、曹洞宗の安心としてもその通り、先づ第一に信仰を起

すと云ふことが大切であります、依つて我高祖承陽大師は學道用心集の中には第一に菩提心を發すべきことを懇ろに御示しになつて居られますが、この菩提心を發すと云ふのは卽ち信仰心を發すと云ふに外ならぬのであります、辨道話の中には一層御丁寧に、「おほよそ諸佛の境界は不可思議なり、心識の及ぶべきにあらず、いはんや不信劣知のしることを得んや、たゞ正信の大機のみしることをうるなり、不信の人はたとひ敎ゆとも得べきことなし、（中略）おほよそ心に正信おこらば修行し、參學すべし、しかあらずばしばらくやむべし」と御誡めになつて居られるのであります、彼の指月和尙は戒法の根元とするところも又信仰であると示されて居ります、卽ち安心の第一歩は信仰であります發心とか發菩提心とか云ひますが、何れも此の信仰の眞に起つたところにおいて眞實菩提心が起き、更にそれが誓願となつて、上は菩提道を求め、下は一切衆生を濟度しやうと云ふ宗敎生活に入ることが出來るのであります、依つて古人も「發心正しからざれば萬行空しく施す」と云はれたが如くに、吾が禪門に於いては先づ第一に正信を起す卽ち菩提心を起すと云ふことが大切であるのであります、勿論これは吾が曹洞宗のみではありますまい、佛敎を通じて何れも必要な事に相違ありません。

三　宗要の二方面

吾が宗安心の要旨とするところは禪と戒とにあります、今說明の順序としてこれを二部門より御話し致さなければなりません卽ち第一を坐禪門とし、第二を受戒門とするのであります、何故であると申すに、受戒は入道の根基でありまして、坐禪は修證の趨歸であるからであります、今私はこれより此の二方面を順序を逐うて一應御話したいと思ひます。

四　禪とは何か

禪と申しまするが、これは支那の言葉でもなければ日本の言葉でもない、梵語の音譯禪那の略稱でありましてこれを意譯すると靜慮となるのであります、靜慮と云ふのは吾々の朝から晩まで晩から朝まで念起念滅するところの此の妄念妄情を靜止するの意から出でゝ居るので、或はこれを定と譯して居る人もあるのであ

ります、されば禪を或は禪定とも云ふ向もあるがこれは意と音とを一時に稱したものと言へるのであります、さて斯の如くにして禪は梵語音譯の略稱ではあるが傳承年久しく、今日に到つては禪と云へばそのまゝ既に意味が出來て來て、禪味であるとか、禪的であるとか云ふやうになつたのであります、元來此の禪と云ふ思想は佛敎全體に行渡つて居つて、古來佛敎を戒定慧の三大部に分けて居る位であります、又聲聞の修行の依所とする苦集滅道の中にも禪はあります、菩薩の修行の六度の中にも又此の禪はあるのであります、併しながら今日私が云ふ禪即ち達磨傳來の正傳の禪は原始の意味よりはズット進んで居るもので單に彼の三學中の一なる定を指すのでもなければ、又六度中の一なる禪を云ふのでもありません、況んや儒敎の靜坐や西洋にある冥想や、外道の禪を云ふのではない。

五　達磨正傳の禪

元より以上云ふやうなものも禪の一種には相違ありませんが、私が今云ふ禪はモット廣大無邊な禪であります、六祖より六代目の圭峯宗密禪師は禪を外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、如來最上禪と云ふ五つに區別されて居ります元來禪は一味平等なものであり絕對なものでありまして、禪そのものに左樣な次第階級や淺深高下の有るべき筈はないが、見やうに依つては又斯やうに見られぬこともありますまい、今暫らく圭峯和尙の說に依つて考へて見ると達磨正傳の禪は卽ち如來最上の禪とも云ふべきであります、高祖承陽大師はこれを以つて「自受用三昧にして佛法の正門なり」と宣ひ、又三昧王三昧とも示されてあります、此禪は單に妄念妄情を靜止すると云ふ丈けの意味ではない、此禪の中には前の六度の禪もあれば四諦の禪も含んで居れば又三學中の定も勿論含まれて居る、乃至一切の正法を含藏せる最上無爲の妙術であるのであります。

六　坐禪の必要

禪と申しますると何んだか話しが遠いやうになるが、禪は高いところや遠方にあるのではない佛道は人々の脚跟下なりとある通り禪は宇宙一杯になつて居る、換言せば、宇宙は皆な禪の露現であります禪は更にこれを佛法の異名とも見られ

るのであります、高祖承陽大師が普勸坐禪儀の中に道本圓通或は宗乘自在と御示しになつて居る如く、元來此の世界中のもの一物として佛法の外のものはない、吾々御互も皆んな佛法の中に遊泳しつゝあることは丁度魚が水中にあるやうでありまして、吾々は寸時も此佛法を離るゝ事は出來ないのであります、所が人それを知らざることは魚が水中に在つて其の水を知らざるが如く、吾々は佛法の中に居りながら佛法と一つになつて居ない、佛法の中に居つて迷つて居るのであります、元來佛法が宇宙一杯になつて居ればこそ、洞山守初禪師は此の樣子を、如何なるかこれ佛と云ふ問に對して麻三片と答へられ、趙州は如何なるかこれ祖師西來意と云ふ問に對しては庭前の柏樹子と云はれてある、眼見耳聞滲漏無しで、松吹く風も、柳を染むる色も、皆佛法の露現ならざるはないのであります、斯の如くにして佛法は吾人の到るところとして在らざる處はない、この道理を見得した人は或は桃花の色を見ても擊竹の聲を聞いても悟れるし又谿聲山色に對しても佛法を聽得せられるのであります、さて斯の如くに佛法は宇宙一杯になつて居て、吾人の到るところ佛法の在らざる處なしとすれば、吾々は修行しなくてもよいかと云ふやうな早合點をしてはならぬ、昔から此の邊の間違はよく有ることであるから大に注意せなければならぬ、元來佛法は到るところにある、道本圓通であるから、吾々は修行せなければならぬのだ、風大の性は周徧なるものであるけれども扇子と云ふ道具を以てせねば風は生じない、佛法が所が定まつて居つたり時が定まつて居つたり人に限られて居つたならば、それこそ修行と云ふ事が限られて來る譯であるが佛法は決して左樣なものではない、道は本と圓通であるから修行する處に現はる修行さへすれば佛法を吾物とすることが出來るのであります、佛法は到るところにあるが、修行せなければこれを吾物として保任することは出來ぬ、吾々は此の佛法を吾物とし、佛法と最も親しくなつてこれを擧手投足の上に活用すると云ふことが大切であります、凡夫と云ふのは佛法と自己が別に成つて居る人、佛祖とは佛法と自己と一つになつた人を云ふに外ならぬのであります、依つて吾々も佛法を吾物にするにはどうしても此の修行と云ふことが大切であります、高祖承陽大師は此の所を、「この法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も修せざるには顯れず、證せざるには得ること無し」と宣ひ又「然れども毫釐も差あれば天

地懸かに隔る」と示したまうたのであります、されば吾々は修行が大切であるが、吾宗の修行の第一義は何であるぞとなれば、云ふまでもなく坐禪であります、依て吾宗に云ふ坐禪は如何なるものであるかを述べねばならぬ。

七　坐禪の儀則

そこで坐禪は吾宗修行の第一義でありますが、元來眞禪現成の時は必らずしも坐を要しない、永嘉大師が「行も禪、坐も亦禪、語默動靜體安然」と云はれ、又高祖承陽大師も「豈坐臥に拘はらんや」と御示しがあつた通り、行住坐臥が眞に寂靜の境を離れなかつたならば、直にこの禪の境界であるけれども、これは眞禪現成の上の話でありまして、初心修行の方法としては坐すると云ふ事が最も法に合つて居る、最も適切であります、そこで坐禪と云ふことが必要であるのであります。

一應坐禪の儀則を御話しすれば、坐禪をするには先づ身體を調へねばならぬ、身體を調へる第一の用心としては衣食住に注意すると云ふことである依つて高祖承陽大師は坐禪儀の中にその住所としては、靜室宜しく、とある、何にしても坐禪をするには喧騷の町中や、歌舞音曲の聲の聞えるやうな所では出來るものでない、佛も遺敎經には樹下閑所或は山林空澤の中にてせよと示されてあるそれ等は國の習慣、家の構造及位置等に依つて一樣に云へぬが成るべく靜かな所が宜しい例へば在家の內であるならば佛壇の前などは適所でありませう、次に食物に付いても飲食節ありと御示しがある、飽食すれば眠つたくなるし、飢えて居つても身體の爲めによろしくない適當に食するが宜しい、坐禪の時は衣帶を緩くした方がよいとある、而して普通に坐所には厚く坐物を敷き、その上に徑一尺二寸、圍三尺六寸の敷物、之れを坐蒲と云うて居りますが、それを敷いて坐るのであります、その次が坐法であります、詳しき事は承陽大師の坐禪儀や常濟大師の用心記を御覽になれば分るゆゑ今は簡略に述べて置きませう、坐法には結跏趺坐と半跏趺坐との二法があります、又結跏趺坐にも吉祥坐と降魔坐との二つがあります、（詳しくは坐禪儀と用心記とを見よ）斯くして結跏趺坐或は半跏趺坐何れでも差支は無いけれども成るべく結跏趺坐が宜しいのであります、而して後脊梁骨を直立し、耳と肩と對し、鼻と臍と相對せしめ、次に右の手を左の足の上に安し、左の掌を

右の掌の上に安じ、兩方の大拇指を面えて相拄ふるのであります、斯の如く正身端坐して而して後に、舌は上の顎にかけ唇齒相着け、目は常に開いて身相全く調つた時に當り左右搖振して、大盤石の如くに坐定するのであります、さて身相が既に調つたならば此度は心行を調へなければなりませぬ、心行を如何に調へるかと云ふに高祖承陽大師は此樣子を、「箇の不思量底を思量せよ、不思量底如何が思量せん、非思量、是れ卽ち坐禪の要術なり」と示されてあります、吾々が端坐の當體に於いて有心と無心とを超越するのであります、有心は散亂に涉り、無心は昏沈を生ず、有心ならば凡夫禪となり、無心ならば死灰枯木の禪となります、有心は生に迷ひ無心は死に沈む、思量は卽ち有心であります、不思量は卽ち無心であります、思量も病なれば不思量も病であります、依つて今は、有心に墮ちず無心に沈まず、昏沈散亂兩ら撲落の樣子之れを不思量底を思量すると云ふ、更にこれを非思量と云ふたのであります、非思量とは非の思量と云ふても差支はない、今此の坐禪の上の正念相續を云うたものでありまして、坐禪の上の正念の作用から見れば、思量もよければ不思量もよい、皆な不染汚の心行であるからであります

更に之れを擴めて云うて見れば、此の非思量の禪的眼睛を以つて見渡すところ、山川も草木も悉く非思量の露現であります、一切迷悟凡聖の累縛を離れて居るのであります、吾人が坐禪の當體直に凡聖迷悟の論量を超越し、直下に第二人無きに到るこの所を非思量と云うたので、こゝは人々實地に行つて見て始めて其の味を知り得らるゝので、少しも他の說明に依つて知らるべきものではない、今まで細々と述べて來たのも畢竟は此所に到る順序に過ぎぬ、これ以上は傳へる事も出來ねば受けるとも出來ぬ、人々一つ實地に坐つて見ねば解らぬのであります、斯くして實地に此の非思量の境に到り得るならば直にこれ佛法を吾物とした人と云ふべきである、萬法と自己とが一體になつたとも又は生佛一如の境に到達した人とも云ふのであります、これを吾宗にては悟りと云ふのであります。

八　坐禪の目的

坐禪の目的は云ふもでもなく悟りを得るにあるのでありますが、悟りと云うたとて單に一時の變つた精神狀態を指すのではありません、坐禪の上に於いて得た

る眞箇の此の非思量の境界、謂ゆる正念相續するところにその目的があるのであります、如何なる場合にも如何なる所に於いても此の非思量の境界を離れざるを得るに到つて、これを眞に得悟の人と云ふのであります、行も禪坐も亦禪、語默動靜體安然と云ふ行履に到つて日用佛法には違はぬと云ふに到り逐うせたこれを眞實得悟の人と云ふのであつて、これ卽ち吾が曹洞宗に於ける安心決了の人と云うて差閊はないのであります、高祖承陽大師はこれを身心脫落、脫落身心と宣はせられてあります、此人こそ眞に佛法保任の人でありまして、行住坐臥の行持が皆な禪となり佛法となつたのであります、平常心是道とはこの邊の消息を云ふたのであります、高祖承陽大師は現成公案の卷に、「佛法を習ふと云ふは自己を習ふなり、自己を習ふと云ふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝと云ふは萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝと云ふは自己の身心及び他己の身心を脫落せしむるなり」と御示しになつて居ります、道理は斯の如くであるが實行と云ふ段になると容易ではない、人々此言を心に銘して、先づ實際に坐つて見ることが必要であるのであります。

九　戒とは何か

宗門に肝要とするところは第二には戒法であります、勿論禪は戒宗ではないから戒法のみを特に說かないけれども禪を修する上に於いて戒を別物にしては居らないのであります、卽ち梵網經には「戒を平地となし、定を屋宅となして知慧の光を生ず」とある如く戒は平地の土臺である本業經には佛家に住在するには戒を先となすとある、又禪苑淸規には「參禪問道は戒律を先となす若し過を離れ非を防ぐに非ずんば何を以つてか成佛作祖せん」とある通り、吾宗に於いては禪を擧揚する上に於いて一方に又此の戒を甚だ重きに置くのであります、詳しくは順を逐うて御話することゝして先づ戒法の事から述べませう。

戒は梵語には尸羅と云ひ、漢には淸淨と譯するのであります、又智度論には沒栗多とあり漢譯して制と云ふので、卽ち制限の意味であります、又は調伏とも申しまして、身口意三業を調伏して惡を作さしめざるが故に斯く云ふのであります、又これを律とも云うて、律は法であります、出世間の禁制を意味するのであります

す、要するに之れは最初佛弟子中に、道ならぬ事を爲すものが有つた都度、佛が其非法を禁制せられたので、それが後に到つて比丘の二百五十戒比丘尼の五百戒、加之三千の威儀八萬の細行と云ふ澤山に成つたのであります、のみならず又之れを或は聲聞小乘の戒、或は菩薩一乘の戒、など〻種々に分類せらる〻樣にまでなつたのであります。

一〇　戒源

以上は事相の上の戒法の由來を述べたのでありますが、戒本來の理體の上から申しますならば、戒法は釋尊時代に始まつたのではない、戒の根源は天地と共に在るのであります、元來天地は無始無終のものであるとして見れば、戒も亦無始無終のもので無ければなりませぬ、例へば天に在つては日月星辰、地に在つては森羅萬象と此の間にあつて一定の條理整然として一點昧ますところ無く一絲亂る所が無い、斯の如くにして戒の始めも無ければ終りも無い、古の古を盡し後の後を盡して居るのであります、依つて指月和尚も「戒源は云ふべからず、若しこれが始めを見れば、未だ眞際となさず」とあります、併しながら今之れを人界に應用し始終相續し、起居動靜に配する時に到つては戒脈と云ふものが現はれ、受授と云ふ事が行はれる事になるのであります、依つて茲に戒法の受授と云ふ事が大切になつて來るのであります、斯の如くにして先佛は後佛に授け、後佛は先佛より受け佛々相傳、祖々相承して今日に到つたものであります、されば戒法は世間の法制となると同時に出世間安心解脫の道理あることを知らねばなりませぬ。

一一　禪戒

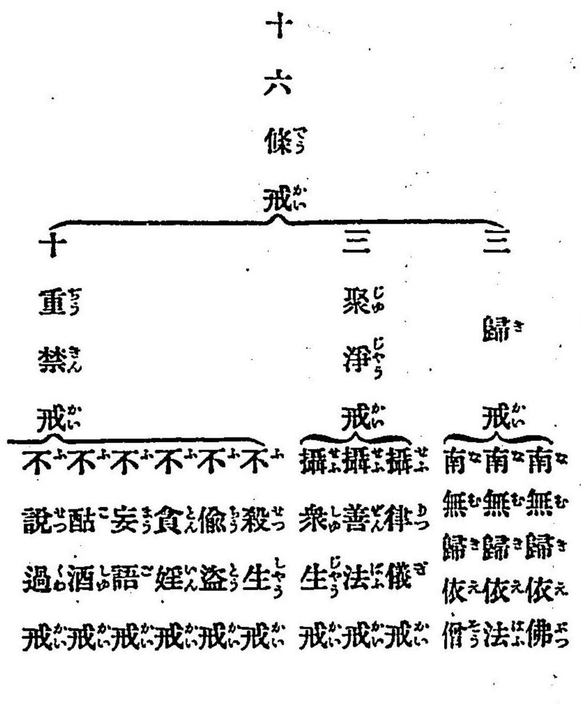
さて斯やうに戒法と云ふものは今日に傳はり、其の種類も中々澤山でありますが、吾が曹洞宗に於きましては、瓔珞經及梵網經に依つて、三歸戒、三聚淨戒、十重禁戒これを十六條戒と云うて、特に之れを禪戒と云ひ、宗門に於ける信仰門の標準となつて居るのであります、何故に特に禪戒と言ふかといふに付いては、禪戒訣注解に、「吾れ禪に家す、故に戒も亦禪の名を得たり、猶ほ圓頓の家には戒も亦圓頓の名あるが如し」とありますする通り、禪宗で立つる戒なるがゆゑに禪戒と

云ふのであります、やはり菩薩戒の事で禪家で云ふから禪戒と云ふのである。

元來この禪戒は何時頃より傳はつたかと云ふに、萬仞和尚の禪戒鈔の序に見るに、「西天結經東地翻譯の前に先つて以降、二十八代次第相承して少林大師に到り、その所得の法を以つて假りに名けて、正法眼藏涅槃妙心と云ひ、一大事因緣と云ひ、威音那畔の最大事と云ふ、即ち是れを禪と名け、之れを戒と號す、禪戒の稱由つて設くるなり」とある所より見れば、此の禪戒は佛が正法眼藏を大迦葉に附囑せられた時に同時に御傳へになつて居るのであります、然らば此の禪戒なるものはその傳ふところ甚だ遠く、佛弟子の行業を制定せられたと同時に甚深の意味が含まれて居る故に威音那畔の最大事と云ひ一大事因緣と云ふのであります、その名稱は同じくこれ戒でありまするけれども、禪戒は直に毘盧性界に入つて毘盧心を提げて、その授受の施設も思議分別するところではありませぬ。

一二　十六條戒

此の十六條戒は成佛の基礎、人道の根底でありまして梵網經には、「衆生佛戒を受くれば則ち諸佛の位に入る位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なり」とあります、故に吾が宗にては受戒入位を以つて安心の歸趨と定めてあるのである、吾が宗は一面に於いては坐禪本位であると同時に他面に於いては戒法本位であるのであります、そこで今十六條戒の名相を上げてその大綱を圖示すれば、



不自讚毀他戒　不慳法財戒　不瞋恚戒　不謗三寶戒

となるのであります、三寶を三歸戒と云ふことは高祖承陽大師佛法僧に歸依するとき諸佛の大戒を得ると稱すと宣はせられたより云ふのであります。

一三　受戒の次第

斯の如くにして、吾が宗に於きましては、戒法を以つて成佛を說き十六條戒を立てるのでありますが、併しながら此の三歸戒を受けるに當つては先づ第一に懺悔と云ふことがあります、我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔と、眞實心の奥底から淸淨に成つたところで此の三歸戒を受けるのであります、三歸とは說明するまでもなく、三寶に歸依するのである、佛は吾々の歸依所、所依所であります、法は佛所說の法であります、此の法を止住護持するところのものがこれ僧であります、此の三は吾々の身心修養の所依となり標準となるところの無二の寶であるから、これを三寶と云ふのであります、詳しくは三寶には三種の功德がありますが、一言にして言ふならば、三寶とは三德であります、宇宙及人生に於ける德の三方面を云ふに外ならぬので、三寶は三つに別れては居るが結局一體の者であります、吾々が懺悔滅罪の後は先づ此の三寶の妙德に歸投依杖して之れを信仰の目標として而して後に、三聚淨戒卽ち、總ての惡事はなすまじ（攝律儀戒）、總ての善業はこれを行はん（攝善法戒）、而してその功德を一切衆生に蒙らしめん（攝衆生戒）との戒卽ち誓願を發すのであります、此三聚淨戒の中では前二戒が自利行で後の一戒が利他行であります、斯の如く自利利他の願を滿足し此の三聚を實際の上に現はして行くところに十戒となつて現はれるのであります、此の十六條戒を身心に受持し實行して行く上におきまして、玆に始めて諸佛の御子となり以つて涅槃大覺の門が開かれるのであります、元來吾が宗は此の所を安心の究極となすのでありまして、安心の大綱としては、

○修證不二
　本證
　　懺悔滅罪
　　受戒入位
　妙修
　　發願利生
　　行持報恩

であります、これ以後の行はこれは發心以後の妙行でありまして、此の中に於いて骨子となるところは受戒入位にあることを知らねばなりませぬ。

一四　戒法の二義

茲に一言添へて置きたいことは、戒法には止惡と作善との二種の意味があります、止惡とは消極的に惡事を作してはならぬと制止する方面でありますが、更に作善と積極的に善事を爲せと勸誘する方面があるのであります。

一五　坐禪と受戒

さて以上の如くに吾が宗の安心を說くに當つて二方面より見る事が出來るのであります、上述の如く一は坐禪門で一は受戒門であります、然らば吾が宗は坐禪門受戒門何れに依つてもよいのであるか、又此の二門が全然別物であるか、而して其の歸所を別にして居るか怎うかと云うに、元來此の受戒と坐禪とは吾が宗本來の立脚から云ふならば決して別々に見るべきものではない、今日實際の有樣を觀るに在家化導の場合には戒法本位にして、出家安心の時には坐禪本位にして居るやうな傾きが無いでもありませんが、これも又必らずしも左樣と定まつて居る譯では素よりありませぬ、それが證據には、高祖大師は辨道話の中に在家人と云へども坐禪すべきことを御示しになつて居り、又坐禪儀を拜覽して見ましても、「上智下愚を論ぜず、利人鈍者を擇ばず專一に工夫せば卽ち辨道なり」と仰せられてあります、此の二門は世間出世間の區別なく共に肝要であつて一を缺いて不可なるものであります。

一六　禪戒一致

斯の如く申すと戒と禪とは全く別物であるかのやうに考へられる人もあるかも

知れませぬが、決して左様では無いので、此の十六條戒を單に世間の法律の條綱の如くにのみ考へたならば大なる間違であつて、その始めは佛所傳の戒であります るが實は人々具有の戒德で、即ちこれ自己の光明であります、端坐の正當直に本來の面目現前して通身に戒體を顯現したところ、自然に大用現前して任運無作に持戒の行業となるのであります、されば十六條と綱目を別にしたところで、直にこれを自己の光明の十六輪相と見ることが出來るのであります、斯の如くにして此の戒は禪の外に存立するものではない、又反對に禪の方面から見てもその通り、禪は戒定慧中の定に非らずして三學の德を含んでをる、六度中の禪にあらずして六度ぴの功德を悉く含んでをるので、吾々が三昧に端坐して直下第二人無きところ、本來の面目現前の時に當つては一方又之れを戒體の露現と見る事が出來るのであります、依つて禪戒訣注解には、「禪中に戒あり一にして二、戒の外に禪無し二にして一、性相共に通じ事理滯ること無し、水中の鹽味色裏の膠青、これ吾が戒を標して禪の名ある所以なり」とあるのを見ても分る、又高祖承陽大師も「三業に佛印を標し三昧に端坐する時、遍法界皆悟りとなる」と宣はせられてある、即ち端坐の當所が戒光の露現であるとの意であります、又太祖常濟大師も「五戒八戒菩薩の大戒比丘の具戒、三千の威儀、八萬の細行、諸佛菩薩の轉妙法輪皆この坐禪の中より現前して盡くることなし」と御示しになり、又「坐禪は戒として持せずと云ふこと無く、定として修せずと云ふこと無く、慧として通ぜずと云ふこと無し」と示されてあるのを以つても、宗門に於ける坐禪と戒法とは決して別物で無いと云ふことが分るのでありませう、更にこれを他方面から御話しますれば、元來戒法の根本とするところは諸惡莫作にあらず、衆善奉行にあらず、自淨其意と云ふところに在るのでありませう、その自淨其意が眞實に實行されて現はれたのが自ら諸惡莫作となり衆善奉行となつて現はるのでありませう、此の自淨其意はこれ佛法の本懷であり又禪の目的であるのであります、して見れば禪と云ひ戒と云ふこれ實に二方面を有するやうでその根本は一であります、禪は之れを實行する場合には軌轍が無いが、禪用を爲すところ自然に戒相が實現せなければならぬ、戒法の根本は禪でなければなりませぬ、されば禪と云ふも戒と云ふも一物の兩面のみ、二即一、一即二、禪中に戒あり戒中に禪ありで、禪戒は全く不二なることが知ら

るゝのでありませう。

一七　修證不二

元來坐禪にしたところで受戒にしたところで吾宗の宗意から云ひまするならば本證の上の坐禪本證の上の受戒でなければなりませぬ、坐禪をした結果成佛すると云ふのではありません、受戒をした後に作佛するのではありませぬ、坐禪の當體が成佛作祖である受戒の當體か入佛位である、然しながら修せねば證は得られぬ修する處に證は自から具足して居る故に修と證とを決して二つに見るものではありません、本證の上の妙修でありますから、證中に修あり修中に證あり、修證不二の上の安心であります、其れを高祖承陽大師は「唯だ自ら長時に退歩せば乳中の酪分明」と示めされてあります、是れ即ち修中任運に證を得ると云ふのであります、されば修の始め終りもなければ、證の始め終りもない、吾々の平常が坐禪となり持戒となるに到らなければなりませぬ、されば此の修證は永劫不退のものであります。

一八　歸結

斯の如く致しまして、平生を等閑にせず、一擧手一投足が佛法と最も親しくなつて、日々の行事が直に佛事佛行と成り皆な報恩の行となり自利利他の業となるに到つて、始めて吾が宗意安心の決擇せられた人と云ふのであります、高祖承陽大師は「世中に佛法なしと雖も佛中には佛法なきことを知るべし」と御示しになつて居る、一寸分り難い御言葉でありますが、佛法と云ふ上から見れば世法と佛法とは二にして不二なるものであります、世間出世間の論なく人一時なりとも眞實に坐禪すれば其の坐禪の上の作用を現はす時に於いては世法も直に佛法となるのであります、此の上より見來れば朝夕心身清淨にして三寶を稱名する時は直に世法是れ佛法となり、坐禪するや禪界には世法はない世法即佛法となるのであります、今是れ佛法を呼んで戒となし禪となすのであります、この佛法は是れ諸人の行履する處、且つ又安心の歸着する處となるのであります。

曹洞宗の安心 畢

明治四十五年三月七日印刷
明治四十五年三月廿日發行

不許複製

著者　秋野孝道

發行者　東京市芝區西久保廣町十番地　一喝社
代表者　久内大賢

印刷人　東京市京橋區南小田原町二ノ九　中野鉄太郎

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　東京市芝區西久保廣町拾番地　電話芝三三二〇一　振替東三三五　一喝社

誰でも宇宙の眞理を悟ることが出來る＝頗る奇！！

機鋒峻嚴・趣味橫溢

顧問　日置默仙

禪　月刊雜誌

顧問　新井石禪

木人方歌石女起舞

看よ！本誌は複雜なる社會の羅針盤なり……

▼壹部金拾貳錢郵稅壹錢▲
▲一年郵稅共壹圓四拾錢▼
▼振替口座東京參參五番▲

讀め！本誌は混沌たる現代の救濟藥なり……

購讀申込所　一喝社　東京市芝區西久保廣町拾番地

誰でも處世の祕訣を得る得ることが出來る＝頗る妙！！

月刊雜誌

佛教界

▲教界無比の良師友　（東京京芝區西久保廣町拾番地）
▲四面開放の活文壇　（發行所　大日本佛教會假本部）

一部郵稅共五錢五厘
一ヶ年郵稅共六拾錢
振替送金は一喝社宛

本誌內容
卷頭に意譯の經典を掲げ本領には時弊を指摘して適當の針路を示し講話は第一流名士の所說にて修養の資料たり教壇の師友たり其他評論あり雜纂あり研究あり文藝あり時報あり各欄痛快を極め趣味に富み正確を期す

曹洞宗兩本山貫首猊下
臨濟黃檗各派管長猊下　協賛并に指導
禪三宗高德碩學諸大家

特約
禪學大系
冠註及註釋書付菊大版總クロース金文字入
全部十二卷七千餘頁原本册數七百四十餘卷

禪學大系の分本特約法は頗る簡便なり、唯全部十二卷を分本特約法に基き發行毎に必ず購求すべきことを特約する旨を記入して記名調印して一喝社へ送附し置けば發行毎に正價の二割引（內地送料は社の負擔ゆへ約二割五分引に當る）の廉價にて安全に購求し得るなり既刊の分は少數の爲めに增刷すること不可能なれば滿員の節は遺憾乍ら御斷りするの外なければ、一刻も豫約せば禪門無二の大寶典とは絶錄の揭合と謂ふべし、要は再び發願することの困難なる然かも我が禪門に缺くべからざる寶典十二卷が斯樣の簡價なる方法にて購求し得らるゝことな警告し且つ分本特約加入寺院地か値かも物殘れることゝた篤志者の各位に告ぐる次第なり殊に御の餘が其の實にとなす爲めに種信徒の有志者に一卷宛寄附せしめらるゝが如きは良策なり

祇園寺開山東皐心越禪師遺稿
前曹洞宗大學教授淺野斧山師編
珍本
東皐全集
和綴二卷帙入美本多く四號活字を用ゆ土佐別漉紙約四百頁コロタイプ版十數種
正價金貳圓　送料拾貳錢

[illegible]

前曹洞宗教學部長新井石禪師著
袖珍
修證義講話
正價金六拾錢　送料金八錢

[illegible]

日置默仙老師監修
新井石禪老師監修
禪雜誌編輯局編纂
再版
禪宗聖典
總クロース金文字入並製　正價壹圓參拾錢
總革製美裝金文字入上製　正價壹圓六拾錢（郵送料拾貳錢）

[illegible]

發行所　東京市芝區西久保廣町拾番地　電話芝三二〇一　振替東京三三五　一喝社

西有禪師題字　日置老師題頌　岡田摘翠師著
森田禪師題字　新井老師校閱　井上哲博士跋
再版增補
禪と人生
正價金七拾錢　送料金八錢

[illegible]

前曹洞宗大學教授淺野斧山師著
再版
禪病論
正價金六拾錢　郵稅金八錢

[illegible]

前曹洞宗教學部長新井石禪師著
通俗
信心銘講話
正價金參拾錢　郵稅金六錢

[illegible]

總持寺獨住第一世諸嶽奕堂禪師錄
曹洞宗總務織田師珍藏久內大賓編
風外禪師
鐵笛倒吹講話
美裝函入冠註本文振假名付　紙質殺上印刷鮮明　正價金參圓　送料拾貳錢

[illegible]

發行所　東京市芝區西久保廣町拾番地　電話芝三二〇一　振替東京三三五　一喝社

N-44

身の疾病に苦む人心の煩悶に痛む人に告ぐ

微笑庵主人

一 禪丹及び禪帶を發行せる由來

人として世に生れました以上は男女の差なく賢愚の別なく、將又、貴賤貧富の論なく、謂ひ知れぬ悲慘の事に遭遇することが少なくない、就中、其苦みは身體に不治の疾病を受くるより大なる苦みはありませぬ、更に、其痛みは精神に不斷の煩悶を抱くより甚しき痛はありませぬ、予嘗て、蒲柳の身、其の大なる疾病の苦みを重ね、且つ又、頑迷の心、其の甚だしき煩悶の痛みを覺へました、が幸にも、明治三十五年八月一日富士山嶺に於て不思議の因緣にて微笑老人より懇切なる垂誡を受けました、黒漆の桶底を脫するとは聊か更に、釋尊直指の端的と達磨大師祕傳の心靈藥とは、從來數年實參實究稍々頑迷の一と道を授けられる、蒲柳の身に幾多の力量を加へたのである、皆是れ其賜なるを思へば感激の情に堪へぬ

世界は廣い、身の疾病に苦む人や心の煩悶に痛む人の尠少からざるを思ひ、此事を私にするに忍びず、爰に多年の實驗に徵し最新の學理に應じて調劑せり、故にや禪門各碩德の賞讃を蒙り猶ほ且つ醫家各名士の證明を得たので一を『禪丹』と名け一を『禪帶』と稱して偏く希望者に頒つことゝなりました、

二 禪丹の效能上と醫學上の效能

初めて坐禪をなす方が最も困難を極める、昏沈、散亂の二魔を打殺して中正なる三昧王三昧に住することを得せしむ、之れを醫學上より云へば身體に常に服用を敏捷にし心氣を爽快にし、健康體にして勢すれば過度に發し繼續して甚しく疲倦を覺へず將殊に自鬱悶せんとする傾向あるに於て特に制的作用を逞うせんとする故に總て神經衰弱、神經性の諸症に卓效あり即ち神經過敏なる氣やみ症、男女情慾興奮の抑制、ヒステリー氣ふさぎ症、其他呼吸器病一切、喘息、痰咳等の諸症に偉効を奏するものである、

三 禪帶の效能上と醫學上の效能

大凡人の疾病を醸し煩悶を重るは頭寒足熱なるが爲めである、されば達人は專ら元氣を下に蒲ざるが故に臍輪飄乎として身健かに心爽かなりたる者は亂りに忘念を上に悉はし身保ちに閑ゆ、然るに禪帶を以て常に氣海丹田即ち下腹部を卷絡し活達に動作に凝滯なく自から腹部及び腰部を溫め精力記憶力を增強し併に冷性の方に之れを醫學上より云へば總て貧血性、子宮病、白帶赤帶、月經不順、流產不妊、其他婦人一切病に特有の奇功を奏するのである、

◎禪丹藥價

（三週間分金二十五錢）
（送料一個付二十錢）

（取次の落望者は三錢組合部）
（券封入廻書）

◎禪帶藥價

（甲種金八十錢）
（乙種金五十錢）
（送料一個付四十錢）

（禪帶の效能は一時的にみ始めて効き）

發行所 東京市芝區西久保廣町 東京三五番 振替口座 一喝社

通俗曹洞宗の安心

秋野孝道

国立国会図書館

019738-000-9

特49-966

通俗曹洞宗の安心

秋野　孝道／著

M45. 3

ABG-0543